

日風堂

〈高知県立歴史民俗資料館だより・おこうふうじつ〉 第119号 令和5年(2023)3月31日

資料見聞

花台図

何十人もの男たちが10メートルを越える高さの造りものを担いでいます。屋根の上に別の建物を重ねるような不安定な構造で作られている異様なものです。上下に歌舞伎の場面が再現されており、上は「義経千本桜」の狐忠信、下は忠臣蔵の「本蔵下屋敷」です。これは近世後半から近代にかけて高知城下町、高知市街で祭祀に出た「花台」という造りものです。花台の名の

通り、桜や菊、菖蒲などが各所に配されていますが、花は造りものだったと思えます。

作者の吉村大我は、明治15年（1882）、高知市帯屋町に生まれ、京都で修行ののち帰郷し活躍した日本画家ですが、本作の制作年は不祥です。

「花台」を描いた作品には、「藤並神社御神幸絵巻」（高知県立高知城歴史博物館蔵）が知られていますが、本作は異なる筆致で、花台の迫力を伝えてくれます。

残念ながら電線が張り巡らされると

花台は移動できなくなり、昭和から平成にかけて高知市の夏の風物詩だった鏡川まつりの回転花台として一時復活したものの、高知城下町の花台は消滅しました。

高知の名物として絵葉書にもなった花台ですが、全国的には京都の祇園祭の山鉦や、九州の博多祇園祭の山笠の仲間で、「山・鉦・屋台」の一種です。ただ、それを「花台」と呼ぶ地域はそれほど多くないようです。

（梅野・那須）



吉村大我筆「花台図」 当館蔵

企画展

まつりの花、いのちの木 ―デザインと道具―

会期：令和5年4月21日(金)～6月18日(日)

梅野光興 曾我満子 那須望 中村淳子

令和5年4月から始まる、高知県出

身の植物学者、牧野富太郎をモデルにしたNHK連続テレビ小説「らんまん」に関連して、県内の文化施設でもさまざまな企画が実施されます。当館では、牧野富太郎に関する館蔵資料を紹介するコーナー展「牧野富太郎をとりまく人々」(本号6頁)とともに、暮らしやまつりに登場する花や木の文化にスポットを当てた企画展「まつりの花、いのちの木」を開催します。

■植物のデザイン

花などの植物を観賞用として飾るのはもちろんですが、花や植物のデザインを生活用具に用いることも一般的です。わたしたちの暮らしでも壁紙やカーテン、衣類や食器などに植物のモ

■素材としての植物利用

言うまでもなく、植物は食料として、建物や道具の材料として、燃料として、その他さまざまな用途において、人間の生活に無くてはならないものです。本展では、その中から木や竹を材料とした民具を紹介します。初公開の階段タンス(写真1)は、香南市夜須町の商家に作り付けのものでした。高さ1.6メートルで引き出しが24も付いています。裏側に回ると引き出しの構造が見えるようになっていきますので、職人の技術をぜひご覧ください。



写真1 階段タンス 当館蔵

チーフはいくらでも見つけることができます。

木瓜、桐、葵など草花は家紋として着物や器物に印されました。写真2は秋の七草の一つ、桔梗を大きく鏡背に配した柄鏡です。桔梗紋を家紋としていた歴史上の人物には明智光秀や坂本龍馬がいました。

■やきものに草花を描く

器や皿などのやきものにもさまざまな花や植物のデザインを見ることが出来ます。



写真2 丸に桔梗紋柄鏡 当館蔵

やきものは、桃山時代以降、茶の湯の隆盛とともに、實用以上に鑑賞することを強く意識した、器形や文様にさまざまな意匠を凝らしたものがつくられるようになります。直接素地に文様を施す方法から絵具による絵付けも加わり、表現の幅が飛躍的にひろがりました。江戸時代に各地でつくられたやきものには様々な草花文が描かれています。松竹梅は、ひとまとめにして、縁起の良い文様として知られています。



写真3 徳利 能茶山焼 当館蔵

■絵画の題材

床の間などに飾られる掛け軸などの日本画にも花は度々描かれています。例えば、高知出身で、明治から昭和にかけて活躍した日本画家、島内松南による「軒端の梅」(写真4)。中央に見ごろを迎えた梅、そのうしろに屋根がみえますが、建物の輪郭はおぼろげ。梅の前に停まる牛車も帳が開けられています。中の人物の着物が覗く

写真3は土佐のやきものである能茶山焼の徳利です。松の太い幹が胴の下部から肩まで染付で描かれています。松の上部は途中で切れています。さらに上方へ伸びる幹を想像することで、より松の大きさが強調されています。松に重なるように背後から折れ曲がった梅の枝が、松の根元近くには、笹竹が描かれています。また、松の反対面に飛鶴2羽も描かれ、まさにおめでたくし文様が器面にちりばめられています。生花を活けたり、懐石や宴会の場を愉しませたことでしょう。

だけで姿が見えません。なんだか幻想的な情景です。

■ 題名の「軒端の梅」とは、京都にある東北院の境内に咲く梅のこと。平安時代中期の歌人、和泉式部が手植えし愛でたという故事が伝わっており、謡曲「東北」にも登場します。この故事を踏まえれば、屋根は東北院で、牛車に乗るのは和泉式部だとわかります。

春の訪れを知らせる1本の梅から、恋多き波乱の人生を送ったといわれる和泉式部へとつながる物語が込められた作品です。

■ まつりのなかの花

祭りや民俗芸能でも「花」は定番です。本紙の1ページで紹介したように、江戸時代末から明治・大正頃まで花台が高知市街地の祭りに出ていました。今も室戸市吉良川御田八幡宮や四万十町興津の秋祭りには花台が登場します。吉良川では、2年に一度、竹



写真4 島内松南筆
「軒端の梅」 当館蔵

ひごに紙製の花を付けたものを飾ります。

一方、佐川町や越知町では盆踊りに花台を作ります。吉良川や興津のように移動するのではなく、踊りの輪の中心に据え置かれて歌い手が立つやぐら台です。屋根にたくさんの竹ひごの花を挿すので花台と呼ばれています(写真5)。

土佐市の秋祭りには花籠が出る所が



写真5 花台 佐川町瑞応 2019年
8月16日の盆踊りには、花台の回り「こりゃせ」「万才」「千本」「絵島」「シャリテ」の5演目を踊る。本展では花台を展示。



写真6 須崎市大谷の花取り踊り 2022年
「鳥毛」と呼ばれるかぶり物が目を引く。5月3日(水・祝)れきみんの日(観覧無料)11時と14時の2回公演。

あります。やはり色紙を付けた竹ひごで籠の形にしたものです。神輿について御旅所へ付いていきます。花台も花籠も、氏子や踊り子に花が配られるのは同様です。

■ 花取り踊りの意味

「花取り踊り」は高知県を代表する民俗芸能です。県西部に多く、県中部では「太刀踊り」と名を変え、真剣を手にした武士を思わせる勇壮な踊りとして知られています。しかし「花取り踊り」と言いながら特に花を取るような演技も造花も出てきません。では一体なぜ「花取り」なのか？その答えは歌詞にありました。

花取りは 七日精進で

七夜の注連を 八夜に引く
「花取り踊り」の「花取り」は、歌詞の一節だったのです。そして「太刀踊り」にも同じ歌があるので、同系統であると思われるのです。

では何の花を取るのでしょうか？「花取り踊り」を長年研究している国文学者の井出幸男氏は、次の歌詞に注目します。

あの山のさんくみやまの

つつじの枝が二枝

一枝は釈迦の土産、また一枝は

身のため(佐川町四ツ白)

「花取り踊り」の花はツツジの花。ということでは5月、春の季節です。そして「釈迦の土産」というのは、旧暦4月8日の灌仏会のことではないか、というのが井出氏の結論です。

花取り踊りは風流に分類される民俗芸能です。風流とは、人を驚かすような仮装や異形、踊りや作り物の総称です。人が喜ぶものは神も喜ぶとされていたので、人為を尽くして神に最高の物を見せるのが風流でした。佐川町、須崎市、津野町、四万十町の花取り踊りが鳥毛のかぶり物や付けた派手な格好で踊り、目を驚かせるのは風流踊りの特徴です(写真6)。「風流」については、6月4日(日)に芸能史研究が専門の佐藤恵里氏によるご講演を予定しています。

■死者の花

祭りだけでなく、葬式にも花は付きものです。今では生花が増えましたが、かつては家の外に花輪が並び、四華（四花）^{しっか}といって、色紙を刻んで棒に巻き付けたものを4本、祭壇に飾ります。土佐清水市松尾では、よりリアルな花を作ります



写真7 花（土佐清水市松尾） 当館蔵

者は花を喜ぶという考え方から来たもののようです。

■いざなぎ流の花の歌と御幣

死者と花についてももうひとつ事例を挙げておきましょう。香美市物部町^{ものべ}の民間信仰・いざなぎ流の太夫は、死者をあの世からこの世に呼び戻す時にこの世に咲く花の美しさを歌います（写真9）。

正月が来れば梅の花

七畝七谷^{みなみのななたにさき}迫々^{さささ}までも

咲きや栄える花なれど

あの世じゃ咲かん花なれば

この世じやいさみの花よ

花をいさみて寄りござれ

歌は七番まであって、二月は椿、三月は桜、四月は卯、五月は五穀、六月はいり（百合）、七月はそばらぎの花です。死者の霊は歌の中の美しい花々

に誘われて、現世に戻ってくると考えられていたのです。

■めでたい松

ここからは樹木のもつ象徴的な世界を見ていきましょう。

日本文化の中で、いろいろな場面で使われる樹木の代表選手と言え、やはり松が思い浮かびます。「松竹梅」と言えば、めでたい樹木ですが、その中でも松が筆頭です。落葉樹と違っていつも緑の葉を付



写真9 いざなぎ流の塚起こし（香美市物部町市字） 1992年墓から呼び起こされた死者の霊は、家に迎えられ、ミコ神として祭られる。

けている常緑樹が衰えない生命力や長寿に結び付けられたからでしょう。婚礼にうたわれてきた謡曲「高砂^{たかさ}」は、落ち葉かきの老夫婦が松の精で、長寿めでたいものの定番でした。そのため祝いの皿や袱紗^{ふくさ}にも、松は鶴などとともによく描かれます。

正月に門松を飾るのも新年を寿ぐ^{しほ}ためでした。県内では「お松様迎え」と呼び、山から伐ってきて立てるまでは家に大切に置いていた所もあり、神聖なものとしていました。ただ、県内には檜^ひや竹など松以外のものを門松にする所も多く、常緑樹であることに意味があったようです。

天満宮の祭神である天神、菅原道真^{すがわらのみちまこと}には松にまつわる伝説があります。屋



写真10 松負天神（三次人形） 当館蔵

敷の松が、太宰府に左遷された道真を慕って飛んでいったものの、途中の板宿(現・神戸市須磨区板宿町)で力尽きて根をおろしたという「飛松伝説」です。ちなみに梅は太宰府までたどり着き、「飛梅伝説」となりました。また、京都北野天満宮には「影向の松」があり、初雪が降ると天神が影向(降臨)して和歌を詠むといわれます。こうした天神と松との深い縁からでしょうか、三次人形の松負天神には、天神のうしろに松がかたどられています(写真10)。

■ 粥箸とゴボー杖

かつて正月15日には箸や棒を使った不思議な行事がありました。

香美市物部町中谷川ではその呪具を「カイバシ(粥箸)」と言い、正月に供えた米を粥に炊いて、箸の先に付けて樹木に載せました。人の指先につけて「爪を祝う」と言い、こうすると健康



写真11 粥箸で爪を祝う(香美市物部町中谷川) 2013年

粥箸はえびす様の棚にまつておいて、田植えの時、田の畦に挿し、稲の豊作を祈る。

になるとも言いました(写真11)。四万十町下津井・下藤蔵では、正月15日に作った粥を前日作った槌やしやもじで大黒柱につけて回りました(田辺寿男「正月行事―大正町下藤蔵・下津井」『土佐民俗』35)(写真12)。大月町でも、春遠ではゴウツエという棒で「成るか成らぬか」と果樹を叩き、次に粥をつけて「成ります成りません」と唱え、子どもの頭を叩くと、頭が良くなると言いました(高木啓夫「幡多西南部の正月民俗(二)」「土佐民俗」3)。これらの事例から特別な時(正月)に作った聖なる棒には、果樹を実らせ、人間を健康にする不思議なチカラがあると思われていたことがわかります。



写真12 モトマツリ(四万十町下津井)

撮影: 田辺寿男、1980年

主人が一升枡に入った男飯を家の柱にすりつける。

■ 神楽の鬼が持つシカンジョウの杖

土佐の神楽に登場するダイバンという鬼は、4人の神様が神楽を舞っているところに現れます。神が剣を持っているのに対し、ダイバンは木や竹の棒を持って暴れて神楽を妨害します(写真13)。実はダイバンの持つ棒は、シカンジョウの杖と呼ばれる魔法の杖でした。神に敗れてダイバンが差し出す七つの宝のひとつで、津野山古式神楽では、上から下へ三度振り下ろすと生きた者は死に、三度振り上げると死んだ者も生き返る不思議な力を持っています。シカンジョウの杖は生命をコントロー



写真13 棒をもつダイバン(仁淀川町池川神楽) 2001年

神楽の日には神輿行列にも付き従う。氏子の体の悪い所を手にした棒で叩くと良くなるとされる。

ルできる呪具なのです。これもまた、樹木にはすごい力があって、果樹や人間や柱に生命力を与えることができるという信仰の名残と思われる。青々と茂り、すくすく成長する樹木に人間が神秘的な生命のチカラを感じていた証なのでしょう。会場で花や木のデザインを味わい、そこに隠された意味に思いをはせてみてください。

3階総合展示室コーナー展

牧野富太郎をとりまく人々

―寺石正路と堀見家―

会期：令和5年4月1日(土)～9月18日(月・祝)

青井 恵理香

(6月16日は展示替)

牧野富太郎をモデルとしたNHK連続テレビ小説「らんまん」の放送を記念して、当館では、3階総合展示室にてコーナー展「牧野富太郎をとりまく人々―寺石正路と堀見家―」を前期・後期に分けて開催いたします。

前期展では、『土佐偉人伝』や『土佐名家系譜』を執筆した「土佐・郷土史の父」寺石正路との交流を、当館所蔵資料から紹介いたします。

■「運命」の出会いが突然に
寺石正路の自叙伝『燈下與児談』によると富太郎と正路の出会い、明治20年(1887)のこと。

富太郎は、このとき、25歳。東京大学理学部植物学教室への出入りをゆるされ、友人達と『植物学雑誌』を創刊するなど、植物学者としての道を順調に歩みだしていました。

正路は、19歳。病気がちで、泣く泣く東京大学予備門(のちの第一高等学校)を自主退学したばかり。保養をかね、佐川英学会の講師として佐川村

に滞在することになりました。

この頃の富太郎はまだ完全に東京で暮らすという意識を持ってはおらず、東京と佐川を行ったり来たりしています。偶然が重なって出来た出会いが正路の運命を変えることになったのです。

■人類学、歴史学の道へ

当時、牧野家は「市内屈指の酒造家」でしたが、富太郎は愛する植物研究ひとすじでした。そんな富太郎の姿を正路は「一見篤実真学者の態度を備えた人」と讚えています。

その人柄は決して傲った様子はなく「手に取る如く明快なる説明を与えてくれた」富太郎との対談にて「生物学研究の洗礼」を受けた正路は「此後又氏の感化に依て幾多の後進者を誘導・輩出するであらう」と富太郎を生んだ佐川の地に「深く」「敬意を表」するに至っています。

富太郎もまた好奇心の強い正路に感じるものがあつたのでしよう。あるとき、『東京人類学会雑誌』を数冊贈っ

ています。「どうやら君の嗜好に適する様であるより送呈する。」

同誌は、坪井正五郎(東京大学理学部卒)が中心となって創刊した学術雑誌で、「色々人類進化的研究を致したもの」でした。内容の面白さに魅了された正路は、「人類学、歴史学を修め、日本に於いて此種の大研究・大著述をなさばや」と研究の道にのめり込んでいくようになります。

「余(正路)が此学の研究を始める諸端はかくして牧野君が啓発してくれたものである。これも矢張牧野君が其徳を以て後進を誘導した一つであらう。」と『燈下與児談』の中で正路は回顧しています。

■二人の友情は永遠に

明治に出会った二人の友情は、昭和になっても続きました。

正路が収集し、終生大切に保管した研究資料の中には、富太郎から

直接送られた富太郎の論文の抜き刷りや書籍が含まれています。

写真は、昭和6年の正月に富太郎から正路に送られた年賀状です。

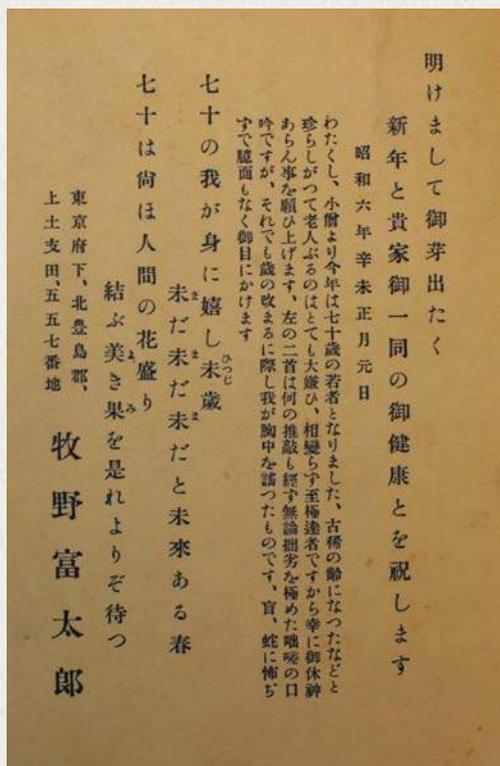
70歳になったがまだまだ「花」盛り。「美き実」をこれからもつけるぞ!と「御芽出たく」と始まる年賀状に添えられた歌は、植物を愛する富太郎らしさを感じます。

また干支の「未」、「未」だ、「未」来と同じ言葉を重ね、頓知の効いた遊び心溢れる上の句からも、富太郎の明るい人柄を感じさせます。

後期展(6月17日～)は富太郎と共に自由民権運動を行った同じ佐川町出身の堀見家資料から富太郎に関する資料を紹介いたします。

前期展：4月1日(土)～6月15日(木)

後期展：6月17日(土)～9月18日(月・祝)



寺石正路宛牧野富太郎年賀状 当館蔵



第13回岡豊山さくらまつり 4月2日(日)

岡豊山の春の恒例イベント、今年も開催します！太鼓やダンス、バンド演奏などのステージイベントや、グルメも昨年より増やしてお待ちしています。また、国史跡・岡豊城跡の史跡ガイドや城跡をめぐる岡豊山スタンプラリーで歴史を感じることも。館内では紙のワークショップ「くるくるさくら」のほか、「前田博士の天然写真展2023 還るところ。」も開催中です。



当日、館の駐車場が満車の場合は、臨時駐車場（岡豊小学校グラウンド）へ。少し歩くこととなりますが、途中で出題されるクイズを解いたり、民家でお接待を受けたり、桜並木をながめながら上がってくると「岡豊山の春」を満喫できること、間違いなしです。
(総務事業課)



岡豊山の「#植物図鑑」

今年度の高知県観光博覧会「牧野博士の新休日〜らんまんの舞台・高知〜」のキャッチフレーズは、『ようこそ、「歩ける植物図鑑」高知へ。』です。ここ、岡豊山も山野草の宝庫です。不定期ではありますが、植物の情報もSNSでお知らせしていきますので、ぜひご覧ください。



また、毎年「岡豊山フォトコンテスト」を開催し、作品を募集しています。テーマは「岡豊山の春夏秋冬」。春の桜は有名ですが、例えば、この原稿を書いている3月のある日、1時間ほど散歩しているあいだに見た花は、ウメ、シロスイセン、ラッパスイセン、フキ、ツバキ、スマレ、クサイチゴ、ホトケノザ、ジロポウエンゴサク、シロバナタンポポ、タネツケバナ、ユキヤナギ、オオイスノフグリ、アセビ、クリスマスローズなど（一部、名前は怪しいかもしれませんが）。まさに、歩ける「#植物図鑑」の岡豊山へ、撮影がてらどうぞお越しください。
(総務事業課)



土佐のまほろばウォーク2023 長宗我部氏と国史跡・岡豊城跡

今年には戦国武将・長宗我部元親の居城跡である岡豊城跡が国の史跡に指定されてから15周年です。長宗我部氏にまつわる史跡と、まだまだある岡豊城跡の見どころをたっぷりご紹介いたします。



- ①4月25日(火) 戦国武将と家臣たち・憩いの地編
毘沙門の滝、金子氏住居跡、石谷土居跡、蜷川土居跡など
- ②5月18日(木) 戦国武将と家臣たち・パワースポット編
西村土居跡、春日社、妙楽寺跡など
- ③10月11日(水) 戦国武将と癒しの地・土佐国分寺
参勤交代道、土佐国分寺など
- ④11月23日(木・祝) じっくり歩けばまだある見どころ①・とことん岡豊城跡
国史跡・岡豊城跡、国親菩提寺跡、信親・一族・親和の墓など
- ⑤12月8日(金) じっくり歩けばまだある見どころ②・岡豊城跡とその麓
武家屋敷跡、水心様祠、江村備後塚跡、浄貞寺分社など
- ⑥※特別編 令和6年1月21日(日)
国史跡・岡豊城跡の山城遺構よ、よみがえれ！
特別編では清掃活動を行います。※あれば掃除道具をご持参ください。
- ⑦令和6年3月20日(水・祝)
ガイドにおまかせ・タツクリ岡豊城跡
国史跡・岡豊城跡

- 参加費：各500円 ※③のみ800円 定員：各20名
- ガイド：土佐のまほろば地区振興協議会
- 申込開始：①・② 好評につきキャンセル待ち
③～⑤ 8月1日(火) 9:00～
⑥特別編・⑦ 10月3日(火) 9:00～

れきみんの日

5月3日(水・祝)

歴民館が開館してから今年は32年。
開館記念日の5月3日は**観覧無料**です。民俗芸能公演、キッチンカー、れきみんクイズの陣、ワークショップなど、歴民館をまるごとお楽しみください。



前田博史の天然写真展2023

還るところ。

3月21日(火・祝)
～4月9日(日)



© HAKUSHI MAEDA

コーナー展

牧野富太郎を とりまく人々 —寺石正路と堀見家—

前期展: 4月1日(土)～6月15日(木)

〈土佐・郷土史の父〉寺石正路と
富太郎の交流を館蔵資料から紹介します。



牧野富太郎の
年賀状 当館蔵

民家で囲炉裏の火焚き

5月20日(土)、6月17日(土) 9:30～12:00

岡豊山歴史公園に移築した
茅葺屋根の山村民家で、定期的
にいろいろに火をいれます。
ご参加お待ちしております。



令和5年度の臨時休館

7月3日(月) 館内特別清掃のため

9月19日(火)～令和6年3月28日(木)

館内設備改修工事のため

ご来館の際は、感染症対策にご協力ください。

岡豊風日(おこうふうじつ) 第119号
令和5年(2023)3月31日
編集・発行 高知県立歴史民俗資料館
〒783-0044 南国市岡豊町八幡1099-11
TEL 0888-862-2211
FAX 0888-862-2110

開館時間 午前9時～午後5時
休館日 年末年始12月27日～1月1日
臨時休館あり

観覧料 (通常展) 大人(18才以上) 470円
団体(20名以上) 370円
(企画展) 通常展示込み 520円
団体(20名以上) 420円

無料・高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳
所持者、身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者
保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所
持者とその介護者(一名)

印刷・川北印刷株式会社

<https://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~rekimin/>
Eメール: rekimin@kochi-bunkazaidan.or.jp

企画展 まつりの花、いのちの木 —デザインと道具—

4月21日(金)～6月18日(日)

植物分類学者の牧野富太郎をモデル
にしたNHKの朝の連続テレビ小説
「らんまん」放送を記念して、美
術工芸品や民俗資料の中から植
物に関する資料を展示します。



企画展関連催し

●講演会「花と風流」

6月4日(日) 14:00～16:00

講師: 佐藤恵里氏(高知県立大学名誉教授)
先着100名

皿鉢 当館蔵

●連続講座「花と木の民俗世界」

①「まつりの花」5月5日(金・祝)

②「死者と花」5月20日(土)

③「いのちの木」6月18日(日)

講師: 梅野光興(当館学芸員)

いずれも14:00～15:30 先着各回100名

●民俗芸能公演「須崎市大谷の花取り踊り」

5月3日(水・祝) ①11:00、②14:00

●ワクワクワーク

①「広葉樹の皿皿&クロモジ楊枝をつくろう！」

講師: 工房刻屋・植村和暢氏

5月14日(日) ①11:00、②13:00、③14:00、④15:00

先着各回5名・参加費500円

②「草木染めであずま袋に模様をつけよう！」

講師: 西峯久美氏

5月21日(日) 13:30～15:00 先着10名・参加費1,000円

③「銅板ヘラ押しレリーフ・花のデザイン」

講師: 当館職員

6月11日(日) 13:30～16:00 先着10名・参加費600円

●ミュージアムトーク

①4月29日(土・祝)・②5月3日(水・祝)・③6月17日(土)

①③14:00～14:30 ②13:00～13:30

※すべて要観覧券(5/3を除く)、

公演・ミュージアムトーク以外は要事前予約

次回企画展

おもちゃの動物園

7月14日(金)～9月3日(日)

この夏、れきみんの企画展示室が動物園
に变身! 当館は郷土玩具収集家の山崎
茂さんと城田政治さんから寄贈されたコ
レクションを収蔵しています。この中か
ら、動物をモチーフにした土人形や張り
子などをピックアップして展示します。
北海道の木彫りの熊や高知県の鯨など
その土地ならではの動物、来年の龍をは
じめ干支の動物も勢ぞろいします。動物
の特徴やかわいらしさを表現した郷土
玩具の豊かな世界をご覧ください。

